

< 解 説 >

「青少年の豊かな成長を支えるためには、学校や地域において、青少年に対し意図的、計画的に『奉仕活動』をはじめ多様な体験活動の機会の充実を図り、思いやりの心や豊かな人間性や社会性、自ら考え行動できる力などを培っていくことが必要である。」と、平成14年7月に中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」が提言されてから5年が経つ。

これまでの間に、学校においては、総合的な学習の時間や特別活動等において取り組まれており、地域においては「体験活動ボランティア活動支援センター」（以下、「支援センター」という。）や諸団体が様々な形で活動を展開させている。

活動をより深め、高めていくためには、「意図的、計画的に」取り組んでいくことが肝心であろう。

全国の都道府県・市区町村の支援センターから寄せられる活動報告及び広報誌から、地域において児童生徒たち対象のプログラムが多彩に用意され、コーディネートされているのが伺える。

支援センターの青少年ボランティアグループ活動支援の対応は二通りみられる。

- 1 支援センター主導で青少年のグループを組織し運営していくかかわり方（運営に当たっては青少年の自主性を尊重する）
 - 2 既にある青少年の組織の継続と発展のために支援するかかわり方
- である。

< 1 について >

北海道せたな町教育委員会大成教育事務所では、区内にあるボランティア活動が活発であった高等学校の生徒が、さらに地域で活動できるよう、「高校生ボランティアグループ」の結成を進めた。高校生の自発性や社会性を高めるために、日常的に住民と触れ合う機会を多くプログラム化したのは、学校側と協議した結果でもある。

活動を進めるに当たっては高校生同士の話し合いを尊重し、主体的にプログラムを作成させ、運営し実践させていくことに配慮している。この「高校生ボランティア活動支援事業」においては、コーディネーターの明確な目標のもとに、しっかりとした「見守り」に支えられて高校生の組織が成長していく様子が伺える。学校の中だけでは体験できない地域の人とのかかわりを通して社会の一員としての自覚も深まっていくことが期待される。

なお、この高校は平成20年3月には廃校になるとのこと、その後の取組をどうしていくのか注目したい。

福島県にいつる体験活動・ボランティア支援センターでは、「青少年グループ『ヤンボラにいつる』」事業に取り組んでいる。小中高校生を対象として、社会性や思いやりの心等豊かな人間性を育成することを目的に組織して、約4年になる。地域の諸団体とつながり、子どもたちに自主的に運営をさせ、ボランティアのグループの組織の活動が広がり、発展させていった例である。今後も、子どもたちの人数がこのまま継続していければ、この地域にとっても心強いであろう。

兵庫県上郡町子どもの居場所づくり推進協議会は、「子どもアクティブ委員会」を結成し、小中学生が自分たちで、計画し、実行することにより、未来の地域リーダーを育てることを

ねらっている。さらに、日常活動の充実と、他の団体とのネットワークづくりが進むのを期待したい。

<2について>

北海道北見市ボランティア市民活動センターでは、すでに結成されている三つの学生のボランティアサークルの支援をしている。それぞれのグループが円滑に活動できるよう、学習会の開催、アドバイス、情報提供等をしている。支援の姿勢は、根気よく見守る形でかわり、学生たちの自主性を尊重している。学生たちの卒業後、毎年人数を確保できるようどう工夫するかが課題となっている。

福島県二本松市安達体験活動・ボランティア活動支援センターは、30年の歴史をもつ「安達わんぱく村チャレンジ教室」の小学生の活動に、高校生がボランティアとして参加することにより、事業を支えている。高校生の活動は、この事業のみであったので、今後、支援センターとして他事業への参加や、地域での自主的取組をコーディネートしたいとの展望をもっている。ボランティアとしてこの活動を支えている高校生の中には、かつて、小学生のときに参加していたメンバーもいる。この意欲的な高校生を何とか組織化して、多様な活動へ導いていくことができれば、地域の活性化にもつながるものと思われる。

(中根 惇子)